

BOOK Review

地域医療構想のデータを どう活用するか

評者 仲井 培雄 医療法人社団和楽仁芳珠記念病院理事長

本書は地域医療構想の基礎データ策定に携わられた松田晋哉先生の著書である。2015年10月に地域医療構想の意義や歴史的背景等を記した『地域医療構想をどう策定するか』（医学書院）を出版されて5年が経つ。この間に社会医学研究の新知見や先行事例の経験値を集積されて、今一度「このツールやデータはこう活用していただきたい」という思いが続編である本書に込められている。

地域医療構想は、2025年をめどに医療提供の適正化による効率的な医療提供体制をめざしている。「地域医療構想」と「医師の働き方改革」、「医師偏在対策」を三位一体とした改革や「診療報酬改定」、「地域包括ケアシステムの構築」等と共に推進される。しかし、2019年9月26日に病床機能の見直しが必要とされた424の公立・公的病院が公開されると、将来の社会保障制度の議論よりも地域とのコミュニケーションの重要性が浮き彫りになった。どのような「まちづくり」をするかという基本構想が、地域医療計画や地域医療構想に反映されない限り、地域住民からの理解は得にくい。

これに対して松田先生は、データに基づく冷静な議論と丁寧な説明が重要だと説いている。地域医療構想策定の要である病床機能別病床数推計の前提条件を理解し、人口変化や医療施設・医療職の状況に鑑みて、地域医療アドバイザーと共に地域概況分析を行うことを薦めている。使用される各種データやツールには、DPCやNDB

等に加えて年齢調整標準化レセプト出現比（SCR）、地域別人口変化分析ツール（AJAPA）等がそろっている。これらを駆使した急性期・回復期の定量基準の導入、慢性期必要病床数と外来医療計画等のアイデアが盛り込まれており、424病院をはじめ全国の構想区域にエールを送られている。

日本は爆発的に高齢者が増える大都市部と、高齢人口は維持・減少して支える人口が減少する地域に大別される。松田先生は、いずれにおいても軽症急性期・急性期後の医療に加え在宅医療も支えられる地域包括ケア病棟と、同病棟を擁する急性期あるいは慢性期ケアミックス病院の活用を期待され、総合診療医や看護師特定行為研修修了看護師の活躍を予想されている。そして、各地域の先進事例や地域課題に真摯に取り組んでいる病院を訪問されて、社会的包摂を礎とする地域共生社会を見据えた人づくり・まちづくりが重要だと結論づけている。本書は構想区域内の各施設の計画立案にも随分と役立つであろう。

松田先生の夢は、超高齢社会に対応した地域包括ケア体制の創出において日本がアジア諸国のモデルとなることである。その第一歩として、コロナの時代にこそ必要な地域住民とつくる地域医療の未来予想図に、読者の皆さまと意思を合わせたい。

地域医療構想の データを どう活用するか

松田 晋哉

2025年まで、あとわずか。
地域ごとの実態に即した
医療提供体制の構築に向けた、
地区診断と施設計画のために。

医学書院

松田 晋哉 著

B5判／144頁／2020年／定価（本体3,500円＋税）／ISBN978-4-260-04252-9／医学書院刊